

書評

〈書評〉

楠見 孝・道田 泰司編

## 『ワードマップ 批判的思考 —21世紀を生き抜くリテラシーの基盤』 (新曜社, 2015年1月, 285ページ)

西垣順子  
(大阪市立大学)

「これまでにない、批判的思考の広がりと深さを示すようなわかりやすい本」(本書p.284)を作りたいという編者達の思いのとおり、批判的思考の概念的・歴史的検討、教授法研究動向のレビュー、現代社会における批判的思考の役割と可能性についての考察を、幅広く行っている書籍である。本書は次の3部から構成されている。第1部では「批判的思考とは何か」について、それが哲学や心理学といった諸学問においてどのように検討されてきたのか、文化や我々の認知がもつ諸傾向・情動等が批判的思考にどう影響するか、知的徳や叡智などと批判的思考はどのような関係にあるのか等といった観点から論じられている。

第2部では批判的思考の教育について、その歴史的な変遷、初等教育から高等教育、各教科等の教育での批判的思考教育の現状や工夫等が分析されている。なお蛇足かもしれないが「批判的思考研究から見た(例えば)初年次教育のあり方」が検討されているというよりは、「初年次教育等において批判的思考がどのように育成されるか」を検討するという観点に立っているようである。第3部では現代社会において批判的思考がどのように生きるのか、私たちの暮らしや社会をどのように支えるのかについて、学問・研究リテラシー、科学技術リテラシー、メディアリテラシー、リスクリテラシー等々の観点から幅広く論じられている。

このように幅広く論じられているというだけではなく、本書には副題にある「21世紀」という独自の観点があり、それが批判的思考の「深さ」を表現することにつながっていると思われる。ただし、21世紀をどういう時代であると考えているのかについて、本書は明示的には述べていない。しかし、この点は本書の立ち位置をとらえる上で非常に重要なポイントであろうと思われる。

評者が読み取った限りでは、批判的思考を検討するに際して本書は、「民主主義」「市民参加・話し合い・合意形成・協働」「多様性・多文化の尊重」を重視しており、「21

世紀はこれらをより意識的に大事に育てていく必要のある世紀である」との立場から、議論を開拓しているように思われる。逆の言い方をすると、21世紀に生きる我々は、これらを容易に失う危機に直面しているとも言えるのかもしれない。このように読み取った理由はいくつかあるが、主なものを挙げておくと次の通りである。

まず、本書の執筆者達は批判的思考研究の源流としてしばしば、民主主義社会を支える市民が習得・実践すべき事柄として批判的思考を重視したJ.デューイ(1859-1952)に言及している。また、(与えられた徳目を習得するのではなく)多様な観点から考える道徳教育や平和教育が提案されている。さらに本書ではたびたび、科学技術政策等の意思決定への「市民の参加」や「(異なる意見や立場の人々の間での)合意形成」の重要性が示されている。執筆者達はそれが粘り強い努力を要する作業であることを十分に示した上で、それでも決して断念はしないという姿勢を堅持しているように見える。そして、人々が生きる多様な文化(国による文化の違いのみならず、例えば日本国内であっても「地域の文化」「女性の文化」「障害のある人の文化」等々の多様性がある)を尊重しながら批判的思考の育成を追求する姿勢が随所に見られ、ポスト批判的思考や批判的リテラシーへの言及、欠如モデル批判など、「批判的思考そのものを批判的に検討する」ことにも挑んでいる。

評者自身は本書を読んで、副題は「21世紀を生きぬく」という、いわゆる強い個人モデルを連想しがちな表現よりも、「21世紀を共に生きる」とか「21世紀を共創する」といった表現にしたほうが良かったのではないかという勝手な感想を持ったのであるが、「民主主義」「市民参加・話し合い・合意形成・協働」「多様性・多文化の尊重」といった事柄を重視しようとしている本書の立場は、そもそもなぜ批判的思考が必要であるのかを、学問や科学技術・産業の発展のためだけではなく、人間がよりよく生きるとはどういうことかという観点からも示唆している

ように思われる。

なお、本書のもう1つの独自性として、「日本の文化に根差した『批判的思考』ということばを定着させたいという意図」(本書vページ)から、クリティカルシンキングではなく批判的思考という用語を使用していることも言及しておいたほうが良いだろう。批判的思考が日本文化にどのように根差しているのかについては、本書で明確には述べられていないので、これも評者の解釈ではあるが、本書の基本的なスタンスとして、批判的思考を外から教え込むよりも、「みんなで考えよう」「話し合って決めていこう」「疑問を大事にして質問しよう」「互いの意見や感性の違いを尊重しよう」という環境を形成することで、個々人がともと持っている批判的思考の種を育てて伸ばそうという姿勢が感じられる(なお、批判的思考のスキルや知識の教授は決して排除されているわけではなく、場面に応じてむしろ積極的にうまく取り入れられている)。そうであるとするならばやはり、外来のクリティカルシンキングではなく批判的思考という言葉を使う必要がある、あったのだろうと思われる。

一方で、副題にあるリテラシーと批判的思考との関係はなかなかに難しい問題だと言わざるをえない。副題の表現からは、批判的思考がリテラシーを支えるという位置づけであるが、「機能的リテラシーには批判的思考の要素はあまり入っていない(p.182)」といった記述もあることから、副題で言及されているリテラシーは、リテラシーの一部を指していると考えられる。そしておそらくそれは、本書で「市民リテラシー」と呼ばれているものであろうと、リテラシーと批判的思考の関係を示しているp.185の図などから推測する。なお本書では、市民リテラシーは「高次の思考スキルと経済、政治、健康などの領域内容的知識に基づく読解能力、コミュニケーション能力である。これらを基盤にして市民は生活に必要な情報を読み取り、適切な行動をとる(p.186)」と定義されており、その教育は、「シティズンシップ(市民性)教育の中核にあり、市民がリテラシーを身に付けて、自律的な責任感をもって社会に関わり、問題解決、投票行動、倫理的・道徳的判断を行うことができるようになることをめざす(p.186)」とされている。また市民リテラシーは、大学の教養教育で獲得されるべきスキルであるともされる

(p.161)。

リテラシーと批判的思考に関するこのような整理は明快ではあるのだが、発達研究者である評者には最後まで「批判的思考によって人はどのように発達するのか?」という疑問が残った。大学教育について検討する場合、特に日本の文脈では10歳代終盤から20歳前半の青年の発達の問題を視野に入れて考えなければならない。イスのJ.ピアジェ(1896~1980)や日本の田中昌人(1932~2005)によれば、発達とは、個人に内在している内発的な自己運動が、外界に働きかけ、外界と自分自身の両方を変化させながら生じる、原則的に不可逆的な変化のプロセスである。人間の発達にはいくつかの質的転換点があり、その転換点を超えると他者との交流の手段が変化し、それが発達の不可逆性を支える。例えば乳児期における主たる交流の手段は情動であるが、幼児期になると話し言葉になる。

このような観点からすると、リテラシーは交流の手段のひとつに位置づく。市民リテラシーは後期中等教育・大学教育段階以降の発達を支える高次の交流の手段と考えられる。ただし「交流」はコミュニケーションと同義ではない。情報を伝達しあうだけではなく、より深く人と人との交わり合うことをいう。本書では市民リテラシーも含めてリテラシーが、基本的には「読解能力、コミュニケーション能力」として位置づいているが、大学教育と人間発達について検討するためには、情報の送受信としてのコミュニケーション能力という枠組みにとどまらない検討が必要になるだろう。

他方の批判的思考については、「コミュニケーションとしてのリテラシー」のみを支えるものと理解することも可能かもしれないが、本書の執筆者達の見解はどうなのだろう。本書において批判的思考研究の源流としてしばしば引用されるJ.デューイが「生き方としての民主主義」という主張をしていくことと合わせて考えると、批判的思考は外界に働きかけ、外界と自分自身の両方を変化させながら発達を進めていくメカニズムの中に、重要なものの1つとして位置づくようにも思われる。本書は広く深く批判的思考を論じていると同時に、青少年や成人の発達と教育に関するさらなる探求の扉を開いていると言えよう。